

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月26日現在

機関番号：24506

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830056

研究課題名（和文）19世紀後半日本における地域エリートの学習歴の変容過程に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Educational Backgrounds of Local Elites in the Latter Half of the 19th Century in Japan

研究代表者

池田 雅則（IKEDA MASANORI）

兵庫県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：60609783

研究成果の概要（和文）：

これまで明らかにされてこなかった、19世紀後半日本における地域エリートの学習歴とその変容過程について、史料調査を通じた一次史料の収集と分析によって検証することができた。農村エリートの青少年期の日記や文官普通試験にかかわる公文書を史料として分析を進めた。そして、19世紀後半の地域エリートは、国家的制度による正規の学校体系に収まらない不定形で複雑な学習歴を歩んでいたことが明らかとなった。本研究の成果の一部は学術図書として平成25年度中に刊行されることになった。

研究成果の概要（英文）：

It is the Purpose of the Study to Clarify Educational Backgrounds of Local Elites in the Latter Half of the 19th Century in Japan. In the Research We Valued Collecting Old Papers and Official Documents. We Analyzed Diaries of Local Elites during Adolescence and Documents of Recruitment Examinations of Junior Officials. We Revealed, in the Latter Half of the 19th Century, Local Elites Generally Attended Nonformal Schools on their Educational Records, which was Outside of National System. Productions of the study will be published during the Current Year.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：教育史・学習歴・地域指導者・判任官・中等教育・各種学校・生涯学習・試験

1. 研究開始当初の背景

(1) 先行研究の蓄積

本研究は、19世紀後半の地域エリートに焦点を当て、学習歴とその変容過程を明らかにしようとするものであった。本研究開始当初、背景となる研究の蓄積については、次の3つがあった。

ひとつ目には、研究者側が理想的とする価値観を評価基準として、過去にその価値観を体現したとみなされる人物の学習歴を発掘し評価する研究である。こうした研究は、社会教育研究・教育運動研究を中心に蓄積されていた（宮原誠一『教育史』、宮坂広作『近代日本の青少年教育』、片桐芳雄『自由民権

期教育史研究』など)。特に、政治運動・教育運動を担う民衆リーダーが、どのような学習歴を経て形成されたかが問題とされた。

二つ目には、法令に示された「正規」な学習歴の体系の確立過程を解明する研究である(国立教育研究所編『日本近代教育百年史』、神辺靖光『日本における中学校形成史の研究』、米田俊彦『近代日本中学校制度の確立』、新谷恭明『尋常中学校の成立』など)。特に、法令発布に至るまでの政策過程、および学校設立に至るまでの地方官僚・議会における政策過程が、取り上げられてきた。

三つ目には、主にハイパーエリート層の学習歴の実態を解明する研究である。こうした研究は、教育社会学・教育社会史を中心に蓄積された(ルビンジャー『私塾』、深谷昌志『学歴主義の系譜』、天野郁夫『学歴の社会史』、天野郁夫編『学歴主義の社会史』、斉藤利彦『競争と管理の学校史』、菊池城司『近代日本の教育機会と社会階層』、小山静子・太田素子編『育つ・学ぶ』の社会史』など)。特に、知識階層ながら財産を持たない士族が中学校・大学・専門学校という学校制度を利用して、どのように近代的専門職に移動したかを解明しうる事例が、ハイパーエリート層が通った高等教育機関を対象とされながら、取り上げられてきた。

(2) 先行研究の課題

しかし、上記の先行研究にはそれぞれ重大な課題が残されてきた。

まず、対象とされる研究対象が一部に偏っていた。この問題は、第一・第三の研究に関して指摘できる。第一の研究は、研究者が持つ政治的価値観に合う人物のみが、研究対象に抽出される。だが第三の研究で明らかにされているように、むしろ社会的な、経済的な成功をめざす出世欲に駆られた青少年も多かった。第三の研究は、近代社会形成への牽引者として理論上のモデルとされる「二重の意味で自由な」俸給労働者にいち早く転身する条件が揃っていた士族層に研究対象が偏っていた。しかし、士族層自体は1割にも満たない。むしろ現実には、理論上のモデルに合致しない者でも、拘束された条件の中で学習歴を積み、地域エリートとして近代社会形成に寄与する場合もあった。例えば、試験検定による教員などである。

二つ目に、対象とされる教育機関が一部に偏っていた。この問題は、第二・第三の研究に指摘できる。第二の研究は、政府の政策立案過程に関心があり、研究対象は中学校・高等女学校・実業学校等の個別命令が発せられた学校種別に限られてきた。第三の研究は、士族層の学習歴に強い関心を抱くため、彼らが積極的に利用した「正規」な機関のみに研究対象が偏っていた。

三つ目に、仮説の実証に取り上げられる史料の種類が、一部に偏っていた。この問題は、全ての研究に指摘できる。第一の研究については、史料の全体から運動的価値に関わる部分のみが抽出されるため、それ以外の側面に関する学習過程や経歴が、分析の後景に退けられた。第二の研究については、対象とされる史料が政策史料であるため、学習歴の実態は取り上げられなかった。第三の研究については、一部の研究を除いて(学校所蔵文書を用いた斉藤前掲書)使用する史料が雑誌や回想録という二次史料に限られてきた。それゆえ、一次史料に遡った史実の検証が不可能となり、検証の信頼性において問題がある。また、あいまいなイメージが示されがちになるか、多様な類型をもつ「不定型」な学習歴の実態の大部分が削ぎ落とされることになった。

(3) 課題を乗り越える方策

第一に、先行研究と異なる課題を立てることである。近代日本の地域エリート層の学習歴形成の変容過程について、実態に即した解明を心がけた。政府が認める「正規」の小中学校のみで学習歴を積むことを義務づけられてきたこと自体が、日本的な特徴である。そうした学習歴のパターンがいかんにして歴史的に確立したのかを史料に即して解明すること自体が、教育史研究にとって重大なテーマであった。

第二に、対象領域の視野を広げることである。教育運動理念や近代的社会移動モデルの実証研究では視野に入らない、身分的・経済的制約があっても学習歴を積み重ねた地域エリート層への注目である。彼らの多くが辿った「不定型」で複雑な学習歴の構造とその変化過程を解明する必要があった。

第三に、新たな史料の発掘である。上記の方策を遂行するためには個々の学習歴に迫る史料が欠かせない。政策史料や二次史料だけでなく、私家文書にも視野を広げた探索が求められた。

第四に、先行研究で使用されてきた史料の読み直しである。先行研究で重視されてきたのは、政治的価値観の表出した場面や正規の学校の中での学習歴であった。しかし、日常的な生活や学校以外での活動の中にも着目されてこなかった学習の機会が埋もれている可能性が考えられた。

2. 研究の目的

これまで十分明らかでなかった19世紀後半日本における地域エリート層の学習歴とその変容過程について、教育史学の手法で検証することである。

具体的には、地域エリート層のうち農村の地

域指導者層と府県の下級官吏の学習歴に注目する。農村の地域指導者層は、土地などの生産手段を保有しながらも、近代化の中で階層解体の危機の中で、村落統治のための新たな技能が求められた。また府県の下級官吏には、官吏登用試験（文官普通試験）に合格することで任用されたものが少なくなかった。そして彼らの多くは、必ずしも国家が設けた「正規」の学習歴を経た訳でない。初等教育を終えた後、結社・私塾・各種学校などの「不定型」な学習機会を利用した者が少なくなかった。「正規」でないがゆえに捉え難い彼らの歩んだ「不定型」で複雑な学習歴の実像とその変化過程について明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 史料収集

本研究は、以下に示すような史料収集を行った。

第一に、農村地域のエリートについての史料である。新潟県に所在が確認された史料（『長善館学塾資料』等）は、数万枚に及ぶものだった。そのため複数の所蔵先（新潟県立文書館・新潟県立図書館・長岡市立図書館・柏崎市立図書館など）に足を運ぶことが必要とされた。

第二に、府県の下級官吏の学習歴にかかわる史料である。山口県の史料については、研究開始では、所在の確認がされた段階であり、史料の収集には及んでいなかった。また、主たる史料（山口県立公文書館所蔵）は貴重史料に指定されていた。それゆえ、筆写のためにまとまった日数をかけて数回調査に入る必要とされた。

地域エリートの学習歴を追究するためには、成人後に彼らが活躍した地域の史料だけでなく、青少年期における彼らの所在地における史料の調査も必要となる。地域エリートの多くは青少年期に大都市に遊学をしていた。そのため大都市圏に所在する史料館・図書館への調査も必要となる。この他、国立国会図書館、国立公文書館、山口県以外の史料館・公文書館への調査をする必要があると思われる。

(2) 史料整理

史料はデジタルデータ、複写や筆者の形で収集されることが想定された。また、大量な史料を限られた研究スペースを活用しながら効率的・効果的に整理していくことが求められた。そのため、必要な設備を導入し、史料のデータによる保存と整理を進めることになった。

史料には活字化されたものはほとんどない。そのため、筆写や解読のために相当の時間がかかることが想定された。実証的な研究を効果的に進めるためにも、まずは集中的に

史料の整理と解読のための時間を確保する方が得策と考えられた。

(3) 先行研究の収集と読解

「研究目的」欄で示した、独自の課題設定をさらに鋭くするためには、関連する先行研究の読解が欠かせない。そのため平成23年度には先行研究を積極的に揃えることが得策と考えられた。

(4) 実証的な検証とその成果の発表

収集していく史料は相当の量にのぼっており、教育史学の厳密な実証的検証に耐えるものであると判断される。

史料から農村の地域エリートおよび下級官吏の学習歴の実像を把握し、その変容について明らかにする作業を進めていくことにした。

共著書『各種学校の歴史的研究』や博士学位論文の執筆を通して得た知見からいえば、本研究が検討対象とする19世紀末（明治30年ごろまで）については、「正規」な学校が未整備であり、学歴資格制度も未整備であった。そのため、「不定型」な教育機会が社会的にもつ役割は現在とは比較にならないほど大きかったとみられる。また、学習歴の蓄積の仕方も20世紀以降のように体系的、単線的なものというよりは、学問領域の移動や重複などもある複線的なものであったとみられる。

以上の仮説を史料に基づいて実証的に検証することを試みた。

4. 研究成果

(1) 2011（平成23）年度

平成23年度は、第一に「正規」でない学習歴を歩んだ地域エリートの「不定型」で複雑な学習歴の実像とその変化過程について明らかにするための史料調査を行なった。第二に他方で「正規」の学校での学習歴を歩んだ地域エリートの学校における学習内容を知るための史料調査を行なった。そして史料の整理と先行研究の整理を進めた。

第一の史料調査については、文官普通試験に合格し判任官に登用された人物の学習歴について調査を進めた。山口県公文書館での調査に着手し、1880年代から1900年代に至る文官普通試験に関わる史料を収集することができた。収集した史料は、文官普通試験の制度構築に関わる史料、合格者の履歴、試験の出題問題、合格者の回答などである。第二の史料調査については、大阪府や岩手県の旧制中学校に起源を持つ高等学校を訪問し、所蔵されている校友会雑誌等を撮影し収集することができた。また、国立国会図書館、国立公文書館や国立教育政策研究所などの諸機関も訪問し、双方の調査を補足する

資料を収集した。

先行研究の整理については、中等教育史研究・官吏研究などの論文や著作を収集し、その整理を進めた。史料はデジタルデータの形で保存している。その数は数千枚に及んでいるが、読解と整理に着手しはじめた。

論文「学制を迎えた農村の漢学師匠」では、農村のエリートが歩む学習歴において、明治の漢学塾がどのような社会的評価を得ているのかについて明らかにした。論文では、初等教育を修めた地域エリートの子弟は、正規の中等学校に進学するよりも、むしろ地域の私塾を積極的に選択していたことが明らかになった。また、そうした中等教育水準の私塾の間で入門者獲得をめぐる競合関係がみられたことが明らかになった。そして、私塾の師匠は地域の知識人として、地域の小学校普及にも尽力したことも明らかとなった。

(2) 2012 (平成24) 年度

平成24年度は、昨年度に引き続き「正規」でない学習歴を歩んだ地域エリートの「不定型」で複雑な学習歴の実像とその変化過程について明らかにするために、史料調査と史料分析を行なった。

史料調査については、文官普通試験に合格した人物の学習歴について調査を進めた。昨年に引き続き山口県公文書館での調査を行なった。大正時代末期までの文官普通試験に関わる史料を収集した。収集した史料は、文官普通試験の制度構築に関わる史料、合格者の履歴、試験の出題問題、合格者の回答などであった。また、判任官任用史料の収集にも着手した。加えて本年度は鳥取県立文書館および奈良県立図書情報館での調査も行った。こちらでも文官普通試験に合格した人物の学習歴の史料を大量に収集できた。

農村の地域指導者層の研究については、1890年前後の地域指導者層青年の上京遊学日記の分析を進めた。対象青年が各種学校で学びながら高度な専門教育を受けるための準備をし、最終的に私立専門学校を卒業するに至った複雑な学習過程を明らかにできた。その内容は近日中に公開する予定である。

また24年度においては、博士論文の公刊に向けた準備を進めた。加えて、学術雑誌に本研究課題の関連著作の書評を依頼され執筆する機会に恵まれ、先行研究の整理が進んだ。

本研究課題は本年度をもって終了するが、平成25年度より28年度の4年間にかけて、科学研究費補助金(若手研究(B))を得ることができた。

また本研究課題の成果を基にした学術図書が、科学研究費補助金・研究成果公開促進費(学術図書)の補助を受け、財団法人東京大学出版会より、平成25年度中に刊行され

ることが決定している。

そして本課題を進める過程で得た知古によって、歴史的教育遺産の世界遺産登録をめざす自治体の協議会メンバーに推挙され、メンバーに就任することになった。本研究の成果について、ユネスコ・イコモスを始めとする世界の諸機関や人々に発信する機会にあずかることが期待できる。

本研究課題の成果を基に、さらに研究を深化発展させていきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

- ① 池田雅則、武石典史著『近代東京の私立中学校—上京と立身出世の社会史』、査読有(依頼)、日本歴史、2013、127—129
- ② 池田雅則、河田敦子著『近代日本地方教育行政制度の形成過程—教育制度と地方制度の構造的連関』、査読無(依頼)、日本の教育史学、55巻、2012、178—179
- ③ 池田雅則、学制を迎えた農村の漢学師匠—新潟県長善館館主鈴木惕軒を事例として、地方教育史研究、査読有、第32号、2011、21—43

[その他]

- (1) 報道関連情報・アウトリーチ活動情報
当研究課題に取り組んでいることが評価され、足利市の世界遺産検討会議のメンバーに選ばれた。「世界遺産登録へ人員増強 足利市の検討会議」『下野新聞』2012年11月6日
<http://www.shimotsuke.co.jp/town/region/south/ashikaga/news/20121105/915898>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 雅則 (IKEDA MASANORI)
兵庫県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：60609783